

想像的鳥類

Imaginary Birds

和田 千藏

動物崇拜Zoölatryは諸國の未開若しくは半開の民族間に發生せる自然的信仰なるが故に、往々迷信Superstitionに陥り科學上全然なきものを信じ之に架空的な名稱を附し傳説Fable等となりて諸書に現はれ今尙人の胸中に疑惑を生ぜしむるこゝあり、斯かるものを名づけて想像動物と稱す。我國に於ては此の種極めて尠けれども支那には頗る多きが如し。以下鳥類に關する斯種の説明を試まむとす、而して想像鳥類中主要なるものは鳳凰、姑獲鳥、鵲、金翅鳥、寒苦鳥、迦陵嚩迦等にして、是等の鳥類は果して動物界のものなるや空想界のものなるや研究すべき價值あるものなり。

一 姑獲鳥 ウツドリ

姑獲鳥は一名産婦鳥、釣星鬼、夜遊鳥等云ひ産婦死して化成す稱せらる、怪鳥にして、其の形状カモメに類似し腰より下部は血に染み支那荆洲及び我國九州地方に棲む云ふ。和漢三才圖會は該鳥に就き次の記事をなせり。即ち胸前に兩孔あり人の子を捕り己が子となす。性純雌にして雄なく七、八月の頃飛んで人を害す。又本草綱目には姑獲鳥産婦所化陰匿爲妖見ゆ。或は潜確類に中國にはウブメ云ふもの夜中飛行して小兒を外に出さず、此の鳥鳴聲兒の泣くが如し云ふ然れども其の形状は詳かならず、今は小兒の衣服を夜中屋外に於て乾かすことを禁す云ふも此の鳥を畏るを京師にても傳へ云々、尙俗傳には此の鳥化して女となり子を人に負はせんす、此の際驚きて逃ぐるものは病死し諾して負ふ者は害なし、雨夜陰火と共に出現す云ふ又小兒の衣類を夜間戶外に置き若し此の鳥の血に塗る、ここあらば其の兒忽ち驚風を起し或は疳を病む云へり、されど固より怪異の妄説に過ぎざれども民間相傳へて小兒を威すに用ひしなるべし。一説に正月七日の鳥追は此の鳥を追ふの意なり云ふ。

二 鳳凰 Phoenix

鳳凰は又丹鳥とも稱し天下道あるものは見らる、ものとして瑞鳥となせり、其の高さ五尺乃至六尺、雞の如き頭、蛇の如き頸、燕の如き頷、龜の如き背、魚の如き尾にして羽に五彩を供へ、聲は五音（音律にして營、商、角、徵、羽の五つの音即ち之なり）に中り、梧桐にあらざれば食はず、醴泉にあらざれば飲まず、飛べば群鳥之に従ふ至徳の瑞應として現はす云ふ。

該鳥は印度の神話、傳説に上るものにして一に美翼鳥の *Upurata* と稱し佛敎書には揭路茶、迦樓羅、識障拏等と記せるもの是なり。而して該鳥は顔面ワシに似たれども其の性質及び全身は半ば人に類似せりと云ふ。古傳によれば該鳥は迦葉波神 *Kasyapa* の諸姪 *Dakṣiṇa* の娘毗那多姬 *Vinata* の仲に生れたものにして、日天の禦者なる曙の神阿盧那 *Arjuna* の弟に當るものなるが、光輝及び勇猛絶倫なるを以て母の力を借らずして自ら卵殻を破りて生じ直に母を見捨て、大空に飛去りたりとあり。

金翅鳥は身体甚だ強大にして火神阿耆尼 *Agni* の如き赫々たる光明を放ち火焰の如き眞紅の眼を有せり、又大威力ありて其の翅より起す猛風はよく三界の旋轉を止め其の猛烈怪速なる飛行は山嶽大地をも震動せしむるに稱せらる。嘗て金翅鳥は自己の強猛を誇りしに昆紐は其の傲慢を挫くため右手に全力を籠め以て該鳥を屈伏せりとこの傳説もあり。又該鳥は龍族の怨敵にして日々五百匹以上の諸龍を捕食するが故に食龍鳥 *Nagaena* 滅龍鳥 *Nagantoka* 等の名稱もあり。彼の慈悲深き乘雲菩薩 *Jinṅtanalam* が將に金翅鳥の犠牲にならんとする龍族の嚚凶 *Kankhacinda* に代りて身を捨つることを仕組し印度佛敎戲『龍の歡喜 *Nagananda*』は金翅鳥に關する右の傳説を基礎とせしものなり。佛敎の不動明王 *Acala* は其の背後に負ふ迦樓羅焰を充期赫々たる金翅鳥王を表はしたるものなり。此の他日本の天狗像の如きも印度の金翅鳥より脱化したるものに相違なかるべく、又莊子にある天鵬も蓋し金翅鳥の謂なるべし。金翅鳥は毗紐神の眷屬たるにより印度各地の毗紐派寺院には概ね該鳥の偶像を安置するが故に人民より崇敬を受くること非常なりと云ふ。南部印度に於ては該鳥の崇拜特に盛なれども或山舎にありては毎夜就眠前必ず毒蛇の害を免れんことを金翅鳥に祈願すること常例なりと云ふ。金翅鳥の説明大略上記の如し其の鳥の真相果して如何なるものなるや實に奇と云ふべし。

四 寒苦鳥

該鳥は印度の雪山に棲むものにして夜に入れば寒氣に惱み巢を構へんと思ふも晝は之を忘る云ふ一種の奇鳥なり一説によれば人語をなす鳥なり云へり又想像の鳥と謂ふべし。五雜俎に曰五く臺山に蟲あり形小鷄の如くにして四足肉の翹あり、夏月毛羽五色其の鳴くこゝ鳳凰我に如かず云ふが如し。冬に至りても毛落ち鳥の雛の如し、寒を忍び號く『得過且過』云ふ、其の糞鐵の如く狀凝脂の如し恒に一處に集まる、醫家は之を五靈脂云ふは是なりと、俳句の冬の季題に用ひるゝは世人の知る所なり。是又其の真相を慥めたきものなり。

五 迦陵嚨迦 (梵語 Kalavinka)

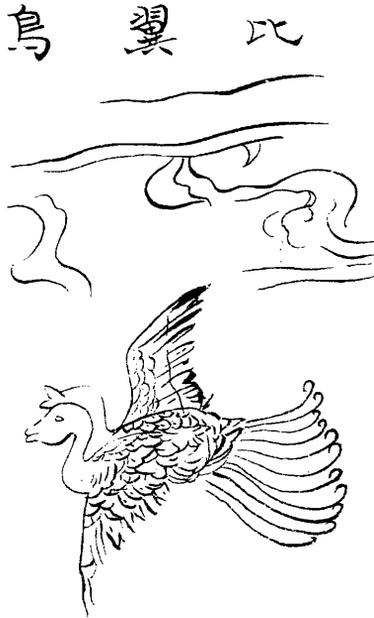
該鳥は又迦羅嚨迦云ひ逸音鳥、妙聲鳥等と譯す、燕雀類に屬する架空的鳥類にして智度論に『如迦羅嚨迦鳥在殼中三來^{トモ}出、發聲微妙、勝於餘鳥』云ひ、阿彌陀經に『復次舍利弗、彼國常有三種々奇妙雜色之鳥、白鶻、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵嚨伽、共命之鳥、元諸茶鳥、晝夜六時^{トモ}出^{トモ}和雅音^{トモ}、其音演^{トモ}鴨^{トモ}五根、五力、七菩薩提分、八聖道分^{トモ}』あり。該鳥は極樂淨土に棲み顔は美人の如く音聲清揚衰雅且微妙にして如來の音聲を除けば一切の人天に及ぶものなし云ふ。而して身體は常に異なり聞くものは耳を欬て見るもの怡神悅思す云ふ。

六 鳩 (酖に通ず)

鳩は妻鳥の名にして其の雄を連日云ひ雄を陰諧云ふ。一説に人若し其の羽を浸したる酒を呑めば死す云ふ。左傳莊三十二年に『成季以君命、命^{トモ}僖叔、使^{トモ}鍼季酖^{トモ}之』。杜注に『鴿鳥名、其羽有毒。以晝^{トモ}酒飲^{トモ}之則死』。説文には『酖毒鳥也。一名連日』。埤雅に『鳩似雁而紫黑、喙長七八寸、作^{トモ}銅色、食^{トモ}蛇。蛇入^{トモ}口輒爛。尿溺著^{トモ}石、

石亦爲之爛。羽翮有毒、以探酒。飲殺人。惟犀角可_ニ以解、故有鳩必犀_ヲ予は該鳥の真相を慥めむがため支那の一紳士に前記の事項を示して質疑せしに、支那には現今にても尙存在す_ニ、而して形態を聞きしに又答へて余の有するキレンジャク（十二黄）Ampepis Garnulus, I₁の標本を指して恰も此の鳥に類似せるものなり_ニ云へり。此の紳士は東京高等師範學校博物科の出身故杜撰なる説ならざる_ニは明かなり_ニして考ふれば、古代の所謂鳩_ニ現代の所謂鳩_ニは其の觀察を誤り居るものならずやこの疑問又發生し確實なる説明する_ニこゝ困難なり。

以上の外、_{オホトリ}も想像鳥にして一説に鯤_ニ稱する大魚の化成せるものなり_ニ、而して其の翼は絶入にして三千里あり_ニ實に架空驚くべし。又比翼鳥は一に羽比鳥_ニ稱する支那の傳説に上る鳥にして、雌雄共に一眼一翼常に一體_ニなりて



比翼鳥

和漢三才圖會

飛翔するものなり_ニ云ふ。尙三足鳥なる鳥あり名の示すが如く三脚を有し常に太陽に栖息するものなり_ニ云々等皆架空的鳥類にして現代尙諸書に散見する所なり。されば今日の科學的鳥類_ニ混用する處も無し_ニせざるが故に特に本項を設けて參考に供したる次第なり。

以上記載したる諸想像鳥類は現今吾人の力にて其の實物を觀察すること不可能なるが故に架空的る記載を見做せども、未だ科學の進歩せざる古代に於ては、栖息し吾人の祖先に一種異様の感想を與へたるが故に斯の如き記載を残すに至りしものにあらざるか亦大なる疑問とする所なり。今一例を見るに夫は古代埃及に生存せし一種奇態の動物にして、其の頭は恰も鳥類の夫れに類似し、其の軀幹は鹿の夫れに似たるものなりき。されば一般に想像的動物に外ならざるものにして只美術の遺跡として存せしものを見做されたりしが、近來の研究にて斯かる動物の嘗て生存せしが或時代の昔に於て絶滅せしこと判明するに至れり。此の如き點より推究するときは假令古代人こそ雖も全然無きものは記載不可能なるべく信じて疑はず。而して斯の如き怪鳥類は適者生存の天則に従ひ強者に制せられ其の跡を絶ちに至りしものなるべし、されば現今分類學に於ては斯かる記録の出所を探明し、以て古代鳥の詳細をも研究し自然系統の關係を一層明かならしむる様努力せざるべからず。本稿を終るに際して一言すべきは右の如き想像動物の存在を認むるに至りし其の経路にして、換言すれば想像動物を彼等の胸中に描くは何に由るやこの事なり。此の問題は一に動物崇拜なる信仰を生ずるに基因すこ謂ひ得べし、而して動物崇拜の起因は各國により一様ならずこそ雖も、概して次の如き事項によるものこそ信ず。即ち或國に於ては或動物が人類以上の強力を勇氣を有することに因れども、一方に於ては動物なるものは全然神の化身と認むること竝に諸動物を或家族若しくは種族の守護獸と信認すること等を其の理由とせるが如き感あり。